

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	松田 和憲
論文題目	南アジアのウラマーによる宗教著作とウルドゥー語の形成—サナーウッラー・アムリットサリーの事例から—		
（論文内容の要旨） 本論文は、18世紀後半からウラマーによって執筆され始めたウルドゥー語による宗教散文に着目し、19世紀以降にさかんになった宗教間・宗派間論争を通して現代ウルドゥー語がどのように形成されていったのかを、アフレ・ハディース派のサナーウッラー・アムリットサリー(1868-1948)の著作から考察するものである。 第1章ではウルドゥー語がどのように形成されたのかを文学史をもとに概観する。ウルドゥー文学史は、詩作を中心に構成されてきた。デカン地方のウルドゥー語による詩作がデリーに伝えられたことによって、ペルシア語を中心に詩作を行っていたデリーの文人たちが、ウルドゥー語で詩を作り始めた。19世紀に入るとイギリス東インド会社の現地語教育機関として知られるフォート・ウィリアム・カレッジでウルドゥー語教育が始まり、近代散文文学が始まるとともに、1857年のインド大反乱以降、インド・ムスリムの没落に危機感を覚えたサイイド・アフマド・ハーンが中心となり、西洋近代教育の普及とムスリムの啓蒙に努めた。彼のアリーガル運動によって、西洋近代的な思考を取り入れたムスリムたちが増加し、ウルドゥー文学にも大きな影響を与えた。以上のように、ウルドゥー語形成過程を、近代史と重ね合わせて整理した。 第2章では南アジアでイスラーム学の担い手を養成してきたマドラサと南アジアにおける三大スンナ派ウラマー勢力との関係を概観している。ハディース学を重視したデリーのラヒーミーヤ・マドラサでは、南アジア最大のイスラーム思想家と言われる18世紀のシャー・ワリーウッラーらのもとに多くの学生が集まった。彼の一族が唱えたイスラーム改革思想の影響を受けたデーオバンド学院が19世紀後半に創設され、デーオバンド派を形成した。また同時期に彼らの主張に反対するバレールヴィー派や、逆にイスラーム改革思想をさらに推し進めたアフレ・ハディース派といった勢力が生まれたことを説明した。 第3章はウラマーによる大衆向けのウルドゥー語著作の潮流に焦点を当てる。ウラマーによるウルドゥー語宗教散文の始まりはクルアーンの翻訳から始まった。シャー・ムハンマド・イスマーイールは1820年代に『信仰の強化』を記した。本書はイスラーム改革思想を簡明なウルドゥー語で記したことで知られ、簡明なウルドゥー語で宗教散文を記す潮流が生まれた。この潮流の中でデーオバンド派の学者として有名なアシュラフ・アリー・ターナヴィーの『天国の装身具』やムハンマド・ザカリー			

ヤー・カーンダラヴィーの『宗教的実践の美德』が書かれた。またこの時代のウラマーはウルドゥー語石版印刷技術を利用して、自らの著作の出版に努め、多くの読者を獲得している。

第4章ではウラマーによる知識人向けのウルドゥー語宗教著作について、宗教間・宗派間論争文学に焦点を当てている。1820年代の『信仰の強化』は当時のウラマーをはじめとする知識人の間で論争を引き起こした。その論争は主にペルシア語で行われていたが、1840年代になると徐々にウルドゥー語で批判・擁護それぞれのための書籍が書かれるようになった。また1830年代からはキリスト教宣教師によるイスラーム批判書がアラビア語やペルシア語、ウルドゥー語で書かれるようになった。それに対してムスリム側も公開討論会や反論の著作で応じるようになっていく。19世紀後半になると、デーオバンド派とバレールヴィー派、アフレ・ハディース派間の宗派間論争や、ヒンドゥー教改革運動として知られているアーリヤ・サマージ、そしてスンナ派から異端的と見なされているアフマディーヤとの間で、ウルドゥー語による論争が起こった。第3章で明らかにした、イスラームを布教するための大衆向けの簡明なウルドゥー語に加えて、本章ではアラビア語やペルシア語の語彙を多く用いた宗教間・宗派間論争のための知識人向けのウルドゥー語があることを指摘した。

第5章は20世紀前半のアフレ・ハディース派ウラマーで中心的な役割を果たしたサナーウッラー・アムリットサリーの宗教間・宗派間論争の著作に焦点を当てる。彼はデーオバンド派やバレールヴィー派だけでなく、キリスト教、アーリヤ・サマージ、アフマディーヤに対しても批判書を記しており、20世紀に活躍したウラマーの中でアーリヤ・サマージとアフマディーヤに対する批判書を最も多く記した学者と言っても過言ではない。彼はアーリヤ・サマージおよびアフマディーヤとの論争において、アラビア語やペルシア語の語彙を多く用いたウルドゥー語ではなく、異教徒にも理解できる簡明なウルドゥー語を使用していたことを明らかにした。これは、第3章で述べた大衆向けのものと同様、簡明なウルドゥー語に属するが、その用途は異なっていた。この潮流はしかし、他宗教との論争の機会の減少に伴い、インド・パキスタン分離独立以降途絶えることとなった。

結論では、以上の議論を総括して、19世紀の宗教間・宗派間論争においてウラマーは知識人向けに著作を記していたが、20世紀においてはアムリットサリーのように、宗教間・宗派間論争を簡明なウルドゥー語で大衆向けに記したことで、大衆が宗教・宗派の属性を意識し始めたことを指摘した。また、アムリットサリーが使い分けた3種類のウルドゥー語の内、知識人向けのものとムスリム大衆向けのものが現代のウルドゥー語を形成していると論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19～20世紀南アジアにおいて、宗教著作がどのような意図を持って書かれ、それが現代ウルドゥー語の形成にいかに関与したかを考究したものである。

本論文5章のうち、第1章と第2章はウルドゥー語および南アジアのイスラームという背景を描くことに充てられる。第3章と第4章は近代南アジアのウルドゥー語形成の過程を、大衆向けと知識人向けに分けて論じる。第5章は、本論文の主たる対象であるアムリットサリーという著述家に焦点を当てる。そこでは、(1) 宗派間論争の中でほかのイスラーム知識人との論争のために用いた高度な術語を含むウルドゥー語、(2) 他宗教の知識人との論争のために、難解なイスラーム用語の使用を避けた簡明なウルドゥー語、(3) イスラーム教徒民衆に向けてイスラームの教えを説くために用いた簡明なウルドゥー語、の3種類を彼が使い分けていたことが明らかにされる。このうち、(1) と(3) が、現代ウルドゥー語を形づくるのに大きな役割を果たしたというのが、本論文の主張である。

本論文の学術的価値は、以下の4点に集約することができる。

第一に、イスラーム思想研究とウルドゥー語研究という二つの学問領域を架橋しようとする意欲的な試みであることが挙げられる。

第二に、イスラーム研究において周縁化されてきた南アジアを取り上げ、他方南アジア研究において周縁化されてきたイスラーム思想を取り上げて、いずれの研究領域にも新たな貢献をしようと試みたものと評価できる。

第三に、近現代南アジアにおけるイスラーム文献に広く目配りし、その中にアムリットサリーという著述家を位置づけようとしたことが挙げられる。あくまでウルドゥー語文献を中心としてはいるが、アラビア語・ペルシア語文献やそのウルドゥー語訳も含めて目配りしようとしている。

第四に、知識人向けのウルドゥー語と民衆向けのウルドゥー語を作業仮説として別々に設定し、それぞれにおいてアムリットサリーの果たした役割を跡付けようとしたことを挙げることができる。理論的整理と文献そのものに基づく検証の両者に支えられたのが、本論文であると判断する。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。